

主催 邦楽連合会

清元協会

港区南青山二の九の五  
電話(四〇二) 〇二四〇番

財団法人 古曲会

中央区銀座八の六の三 新橋会館  
電話(五七二) 〇二一六番

常磐津協会

港区南麻布五の三の四十六  
電話(四四四) 三〇二〇番

長唄協会

中央区銀座八の十一の九  
電話(五七二) 四九四五番

社団法人 日本三曲協会

文京区白山五の二十六の十二  
電話(九四二) 二三七六番

(五十音順)

後援 東京都

昭和四十七年二月八日(火)

第一生命ホール

第一部 一時半開演 四時終演

第二部 五時開演 七時半終演

東京都文化助成公演

都民におくる

第二回 邦楽演奏会

## 第二回邦楽演奏会によせて

東京都知事 美濃部亮吉



平和とくらしについて、いま、都民の多くが不安を持っている。また、東京は空も水も土もよごれ、生活環境が非常にわるくなつてしまった。人間にとつて自然の破壊は心の破壊につながる。私は都民のみなさんといっしょに住みよい東京づくりをすすめるつもりでいる。

あわせて心の破壊をくいとめ、ゆたかな活力を養うために私たちはすぐれた芸術をたくさん持っている。こういうすぐれた芸術を安い料金で鑑賞して

いただきたい——こういうねがいはじめたのが芸術文化団体の公演に対する東京都の助成である。

ことしはその四年目になるが、ことしも音楽・演劇・舞踊・古典芸能などの各分野の公演がおこなわれる。この邦楽演奏会もそのひとつで、昨年にひきつづき、日本の伝統音楽が一堂に会して、とかく忘れられやすい日本のよさを、ゆつくりと鑑賞していただく催しである。

都民のみなさんが心からたのしんでくださることを期待します。

御 礼 邦 楽 連 合 会

本日はようこそお出かけ下さいまして、ありがとうございます。昨年につづいて、ごらんの通り、第二回の邦楽演奏会を開催することができました。御協力下さいました皆様に、厚く御礼申し上げます。

このように、邦楽が自主的に集まって演奏会を開くということは、今までにあまり例がありませんでした。これからも、この催しを土台にして、邦楽について考えたり、話し合ったりして、よりよいあすの邦楽のために努力して参りたいと思っております。

ですから、今日お聞き下さいました御感想、御意見など、卒直にお寄せ下さいますようお願い申し上げます。

この催しは、やっとはじまったばかりです。しかしこの演奏会は、これからも、当分は年一回ですがおよそ同じ頃に、二月か三月に開いて行く予定であります。ですからお知り合いの方々に御吹聴下さいまして、この催しがいつまでも盛大に行われますよう、よろしくお願い申し上げます。

私たちの祖先が創り、育て、伝えてきた日本の音楽が、あまりにも粗末に扱われてきたように思われます。これをこういう機会に考えなおしてみたいと思います。

何かと不行届の点もあるかと思いますが、その点はお許しを願って、どうぞ御ゆつくり御楽しみ下さいますよう、御願ひ申し上げます。



四、三曲岡

康

砧

尺八	三絃	箏	箏
山口五郎	伊藤愛二	伊藤松博	波邊伊久保
		天野伊佐衛	川上伊津美
		伊藤美恵子	小島伊秀史
		山根伊千代	伊藤松超

五、常磐津恩

愛

贖

関

守(宗清)

同	同	同	淨瑠璃	常磐津	文字太夫	三味線	常磐津	文字兵衛
同	同	同	常磐津	須磨太夫	同	同	常磐津	文字蔵
同	同	同	常磐津	小文太夫	上調子	同	常磐津	八百八
同	同	同	常磐津	八重太夫				

六、清元明

鳥

花

濡

衣(明鳥)

同	同	淨瑠璃	清元	初崇太夫	三味線	清元	正寿郎
同	同	清元	富士太夫	同	同	清元	正三郎
同	同	清元	清美太夫	上調子	清元	正之輔	

第二部番組（五時開演）

一、三曲楓

の

花

箏低音

箏高音

箏高音

米川	文子	米川	文勝之	永山	文佐恵
藤代	文津奈	米川	文志津	小川	文多緒
田中	文華奈	大貫	文加寿	森田	文志補
長谷川	文千佐	竹下	文登志	齊藤	文志津己
荒木	文芙佐	野間	文綺志	米谷	文登季
山元	文志生	関	文晴	藤田	文延加
五月女	文勝於	早藤	文貞以	秋元	文昭加
白杵	文元詩	渡辺	文伊登	滝沢	文晴代
稲葉	文浩香	妹尾	文千香	吉崎	文砂己
鈴木	文元永	戸村	文比佐		
山上	文余志	石川	文以東	尺八	
				川瀬	順輔

二、官藺道

行

袖

屏

風

四世官藺千寿作曲

浄瑠璃 宮藺 千美喜  
同 宮藺 千恵寿

三味線 宮藺 千寿  
同 宮藺 千初

三、清元幻

椀

久

浄瑠璃 清元 寿美太夫  
同 清元 啓寿太夫  
同 清元 美寿太夫  
同 清元 美喜太夫

三味線 清元 勝寿郎  
同 清元 秀二郎  
上調子 清元 寿三郎

四、常磐津 妹背山 婦女庭訓 (お三輪御殿)

浄瑠璃	常磐津	文字加市	三味線	常磐津	文字源
同	常磐津	文字香代	同	常磐津	文字源寿
同	常磐津	政三紀	上調子	常磐津	文字敬子

五、長唄 勸進帳

唄	和歌山	富十郎	三味線	杵屋	勝三郎	笛	福原	百之助
同	和歌山	真五郎	同	杵屋	三造	小鼓	望月	太喜右衛門
同	和歌山	富之助	同	杵屋	勝一郎	小鼓	望月	太喜雄
同	和歌山	富司郎	同	杵屋	勝錦吾	小鼓	望月	太健志
同	和歌山	富市郎	同	杵屋	和四三郎	大鼓	望月	太健志
同	和歌山	京之副	上調子	杵屋	和四三郎	大鼓	望月	太健志
同	和歌山	京之副	上調子	杵屋	三十郎		望月	太健志
同	和歌山	京之副	上調子	杵屋	三十郎		望月	太健志
同	和歌山	京之副	上調子	杵屋	三十郎		望月	太健志
同	和歌山	京之副	上調子	杵屋	三十郎		望月	太健志

曲目解説 (演奏順)

第一部

一、長唄 越後獅子

篠田金次作詞、九世杵屋六左衛門作曲。文化八年(一八一二)三月江戸中村座初演。七変化舞踊「選桜手蘭葉七字」の一部。三世中村歌右衛門が演じて好評を博した。

当時、歌右衛門の好敵手三世坂東三津五郎が、市村座で七変化を出し、その中で歌右衛門を批難するせりふがあったとかで、歌右衛門の方で一夜作りでこの七変化を出し、みごとに勝ったといわれている。

江戸時代に、越後国(新潟県)蒲原郡月潟村を本拠として、踊りや軽業をみせては米銭をもらい、諸国を歩いた角兵衛獅子は、別名を越後獅子という名で世人に親しまれていた。

これを最初に題材としてとりあげたのは地唄で、天明(一七八一―一八八)年間に峰崎勾当が作曲し、のち箏曲に移された。それを一夜作りで長唄に作り直したのだが、ひなびた情趣と陽気な手つけで親しまれ、名曲の一つとなっている。

特別の筋もなく、ただ越後名物をよみこんだものだが、巧みな作曲で、流行している。

二、三曲 春の曲

曲名からしてずばり春を代表する純箏曲で、三絃の手はありません。全国で愛奏されている千鳥の曲と並んで、同じく名古屋の吉沢検校の作曲した、古今組という雅楽の調子を加味した古典風の曲です。この名称は歌詞を古今和歌集から借用したのと、調子も高雅な雅楽調を加えたので、箏曲としての気品を賣んで古今調子(こきんちょうし)としたもので、古雅の香り高い曲です。歌詞は古今集から撰んで六首、鶯の初音、若菜、桜、散る花、藤の花、春を送る老鶯、を並べて春を謳歌したものが本来はそれを並べた歌物であったが、明治になってこれを流行させるため、当時は手事物全盛時代で、その四歌五歌の間へ長い手事を二段入れて弾き出したのが京都の松坂検校、それが現代へ伝来しているのです。その旋律に妙調があつて華やかな曲として一般に弾かれているのです。(藤田俊一)

三、萩江 芦刈

原拠は能楽の「芦刈」。日下左衛門が落ちぶれて、御津の浜で声を売る男になつていくくだりをとつたもの。

この歌詞は萩江節の正本集「萩江小集」「萩江閑吟集」などに残っていたが、曲は絶えていた。それを十四世杵屋六左衛門氏が新しく作曲した。萩江会々々長だつた故篠原治氏から依頼されていたが、なか／＼作曲が進まなかつた。ところが篠原治氏の急死(昭和四十五年八月七日)された夜に、不思議にすらくと出来上つたという曲で、昭和四十六年六月一日、新橋演舞場で開かれた第五十二回古曲鑑賞会で発表された。

津の国難波の浦の住人日下の左衛門は、零落して芦売となつている。その妻は都に上り、ある高貴の人の若子の乳母となり、ようやく生活も安定したので、従者とともに難波へ下り、夫の行方をたづねている。そこへ左衛門が芦を売りにきて、種々の芸をする。(この場面が萩江節)彼はそこに妻の姿を認めると、わが身の上を恥じて逃げかくれるが、妻は左衛門を尋ね出し、都へつれて帰るといふ筋。

#### 四、三曲岡 康 砧

この曲は山田曲としては一風変わったもので、多分に手事風のところがあり、歌ものといっても詩情ゆたかな秋の夜の砧の拍子をとって、器楽性の勝った曲です。もとの曲は、江戸時代からあった胡弓の藤植流の「砧の曲」を筆に移したもので、胡弓の家元であった山室保嘉さん（山室千代子女史の養父）と三世山勢松韻師と相談（明治三十年頃の事）の結果、箏曲として世に出したものとなっております。その原曲は岡安小三郎作という説がありますが、これを岡康砧としたのは、徳川家康が駿府滞在中の徒然（つれづれ）にこれを聞いて、大変に感動して家康の康を呉れるから岡康砧にと、それから岡康となったとの伝説があります。とにかく山田曲としては異例の手事風のものとして、その華麗な旋律が愛され、手練の技（わざ）があるので三曲合奏としての流行曲となっております。（藤田俊一）

#### 五、常磐津 恩 愛 贖 関 守（宗 清）

奈河本助作詞、五世岸沢式佐作曲。文政十一年（一八二八）十一月、江戸市村座の「貢玉雪源氏鼠貞」の三立目に初演された。配役は、宗清（三世坂東三津五郎）、常盤御前（二世岩井兼三郎）。出演は四世常磐津小文字太夫、五世岸沢式佐ほか。

「源氏烏帽子折」の二回目、宗清館の場の翻案で、この場から変ると鞍馬山となり、これは牛若丸の見た夢となる。そのことは、本曲の終りの文句に暗示されている。したがって、安政三年に再演されたときには、このあとに長唄の「鞍馬山」が上演された。

平清盛の命令で、源義朝の妻とその遺児たちを捕えようと、弥平兵衛宗清が、雪の木幡で関をかためている。と、そこへ常盤御前が今若、乙若、牛若の三人の子供を連れて通りかかる。宗清に見破られるが、常盤は操とひきかえに、三人の命を助けてもらうという筋。

#### 六、清元 明 鳥 花 濡 衣（明 鳥）

ふつう「明鳥」といえば、新内節の代表曲で、浦里時次郎の名はあまりにも有名である。

嘉永四年（一八五二）江戸市村座の二月狂言で「仮名手本忠臣蔵」裏表二十二段という大作を上演のとき、八段目の裏に浦里（初世坂東しうか）時次郎（八世市川團十郎）で明鳥を出すことになった。が、新内節では長いし、舞台効果もうすいところから、当時名人といわれた清元太兵衛（二世延寿太夫）に、清元として作曲するように頼んだ。

そこで太兵衛は、桜田治助と相談して、冗長な部分を削り、舞台に向くように文句を変えて作ったので、新内にくらべると、よほど簡単でわかりやすくなっている。そして、太兵衛の美音と、団十郎、しうかの演技と相まって大好評を博し、以後、忠臣蔵とは関係なく上演されるようになった。

山名屋の浦里と深くなじんだ時次郎だが、金に困ったために、逢うこともできず、山名屋からも出入をとめられてしまった。そこをひそかに忍んで行って、浦里の部屋に入り、居続けの客のようにごまかして、二人は一緒に死のうかという、くぜつの最中、そこをやりてのおかやに見つけられ、浦里はひたたてられ、時次郎は若い者に叩かれた上、楼外へほうり出される。（こまで上）

内緒で時次郎をひき入れたというので、雪の降る庭に、浦里はひき出され、古木にしばりつけられて、亭主に折檻される。ところが浦里は、時次郎と別れるとはいわない。やがて亭主が屋内に入ると、浦里の述懐。そこへいつの間にか時次郎が扉をのりこえて忍びこみ、浦里を助けて逃げるという筋。

### 第二部

#### 一、三曲 楓 の 花

これは明治時代に京都の松坂検校が純箏曲として作ったもので、三絃の手はありません。箏の二部合奏曲として派手な手事もので、それを連続音の尺八がからんで縫って行く。歌の内容は京都の嵐山を中心に、その周辺の風景を描写したものです。嵐山は本来桜と楓の名所で、それらを鑑賞して、大堰川（おういがわ）の鮎、戸奈瀬の岩間のつつじなど、その辺の風光を綴（つづ）った叙景詩、さらに風韻情趣を添えて松坂一流の軽快な手法で、前唄・手事・後唄の三段形式にしてあります。その手事は高低二部合奏で、春の気分を十分に浮きあがらせ、全曲通じて華やかに弾かれます。京都松坂検校の作品は割に少ないが、この曲が代表作として一般に知られ、京物中の明治新曲として広く愛奏されております。楓というのは風に弱く吹きさらされるので、楓の字になつてゐるとの事ですがどうでしょうか。（藤田俊一）

#### 二、宮 蘭 道 行 袖 屏 風

昭和三十八年、四世宮蘭千寿作曲。

宮蘭節（蘭八節ともいう）の古い正本集に、宝暦十三年（一七六三）に刊行された「増補宮蘭集都大全」というのがある。その中に「仇名の旅枕」として、おさん茂兵衛の道行文が収められている。それを整理してわかりやすくし、新たに曲をつけたもの。

京都大経師の妻おさんと、手代の茂兵衛がひよんなことから密通の汚名をうけ、いいわけもできぬようになり、ついに二人は心中ときまり、雪道を亀山まで落ちて行くありさまを述べたもの。題名は、二人が寒さを防ぐため、袖を屏風にしてかばい合うところからつけられた。

#### 三、清 元 幻 椀 久

岡村柿紅作詞、五世清元延寿太夫作曲。大正十四年四月、新橋演舞場開場記念の「東をどり」で初演された。

大阪堺筋の椀屋久右衛門が、新町遊廓で遊女松山と契り、豪遊のはて座敷牢に入れられ、発狂して死んだという実説があった。これが演劇・音楽・舞踊の世界に脚色され、椀屋久兵衛と松山の物語りは、「椀久も」という一つの世界を作つてはやされた。

この「幻椀久」は、そのうちの一番新しい作品である。遊女松山に通いつめて産を失い、ついに発狂した椀屋久兵衛（椀久）が、かつて豪遊したころの松山や村間らの姿を、幻に見てうかれさわぐが、やがて現実にかえつてひとり淋しく松の根方に立ちつくすという筋。

#### 四、常磐津 妹背山婦女庭訓(お三輪御殿)

義太夫節の「妹背山」は、明和八年(一七七二)一月、大阪竹本座で初演されて以来、いわゆる王代物中の傑作として、歌舞伎にも脚色されよく知られている。

こうした義太夫作品を、江戸の舞台で通し上演するときには、道行は江戸の浄るりになおして演じられるのが例で、富本節で早くに上演されたことがある。

常磐津になったのは、天保四年(一八三三)七月、河原崎座上演のときからで、宝田寿助の補綴、岸沢市蔵の作曲、三世常磐津小文字太夫(豊後大掾、四世文字太夫)の出演で、このときの道行「願系縁菩提」は、名作として現在でも独立して上演される。

この「お三輪御殿」もそのときに作られたもので、義太夫の「竹に雀」のくだりを脚色したもの。次の「鱧七上使」とで三部作になっている。

杉酒屋の娘お三輪は、求女と深い仲である。一方、求女は蘇我の入鹿の妹橘姫が、自分を恋しているのを利用して、入鹿の御殿に入ろうとする。そこで橘姫の振袖に糸をつけ、あとを追って行く。同じようにお三輪は、求女の着物の裾に糸をつけ、そのあとを追って行く。(ここが道行の終り)

橘姫のあとを追って、求女は入鹿の御殿に入ってしまった。そこからがこの場面になる。

求女につけた糸は切れてしまったが、ようやく御殿に入り込んだお三輪は、あまりの広さにうろくしている。と、そこへ女官が通りかかったので、今入った求女に逢わせてくれと頼みこむ。女官たちは、よいなぐさみものと、婚礼の稽古とあって、お三輪をからかう。求女恋しさでいっぱいのお三輪は、泣きながら「竹に雀」の唄をうたうという筋。

#### 五、長唄 勧進帳

この曲は「越後獅子」などと共に、長唄の代表曲としてよく知られております。元来が舞踊劇の地として作られたものですから、歌詞だけをきいていたのでは意味が通じないところがあります。それにもかかわらず広くてはやされているのは、劇としての勧進帳が、名優九代目團十郎の妙技によって価値づけられ名高くなったのと、今一つ、節付がサラサラとしていて、演奏しやすいことに原因していると思われます。いずれにしても、長唄の美点を集大成したといってもよいほどの名曲とされ、音楽として広く知られています。

作者は三世並木五瓶、作曲は四世杵屋六三郎(のちの六翁)が、一世一代としてその技倆を振ったもので、作曲に三ヶ月を費したと伝えられています。それも、はじめは全曲二上り調の説教節じみた節付だったので、のちに改作して、現今の本調子となったと伝えられています。

なお初演のときの「勧進帳」は、いわゆる松羽目物の先駆作品であり、また、演奏にあたっては立分れの形式をはじめたことも、特色として知られています。